

# 活動報告書

報告者氏名： 三木信子 所属： 東京都八王子市立第四小学校 記録日：2017年2月1日

キーワード： 難聴 音声言語 難聴に関する自己理解

## 【対象児の情報】

### ○学年

小学校5年女子。通常の学級に在籍している。

他校から、実施者が勤務するきこえとことばの教室へ、週1回2単位時間通い、自立活動の個別指導を受けている。

### ○聴覚

両側感音性難聴。

平均聴力レベル 右耳 48.8dB 左耳 103.8dB。

右耳に補聴器を装用し、右耳だけで音声言語を聞き取って、日常生活を送っている。

補聴器を装用していても、話し手の口形が見えなかったり、話し方が早口だったり、周囲に雑音があったりすると、単音節レベルで2割以上の聞き誤りがみられる。

### ○言語

コミュニケーションモードは、音声日本語のみである。

単語を聞き取って選択絵を指す力が、平均より低い。

相手と共有していない話題では、音声言語による意思疎通をあきらめ、一人で行動しがちである。

### ○難聴に関する自己理解

保護者、本児とも、特に片耳装用の場合、補聴器を装用しても、条件によって聞き誤りや聞き落としが生じやすいことや、口形をはっきり見せて話したり、短文で話したりしても聞き誤りが生じがちであること等、片側難聴の特徴を充分には認識できていない様子である。

## 【活動目的】

- (1) 会話を楽しむ。
- (2) 語彙力の向上を図る。
- (3) 上記を通して自己の聞こえ方の特徴を知り、難聴に関する自己理解の力を育てる。

## 【実施期間】

平成28年6月～平成29年1月

## 【実施者と対象児との関係】

本児は他校の通常の学級に在籍している。実施者は、きこえとことばの教室で、毎週2単位時間、本児の個別指導を担当している。

## 【活動内容と対象児の変化】

### 1. 対象児の事前の状況(平成28年6月)

#### (1) 会話の特徴

- ・相手と共有していない話題について、相手からの質問に積極的に答えようとしていたり、分かってもらえるまで言葉で説明したりする様子が見られない。相手の話が長くなると、下を向いて他のことを始めることが多く、後で話の内容について質問すると、聞いて理解しようと思っていなかったことが分かる。従って、互いに知らない話題について、相手と同じイメージをもって、同じ話題で会話を継続することが困難である。
- ・自分の話を相手がすぐに理解できない様子を見ると、何も言わずに席を立ち、一人で行動を開始することがある。

- ・相手の言葉が曖昧に聞こえたとき、聞き返して確かめる習慣がなく、自分なりに推測した結果、理解を誤ることが多い。
- ・国語のテストのように、文字で情報を提供された場合、正しい回答を記入できることが多い。

## (2) 語彙力に関する特徴

・PVT-R(絵画語い発達検査)

小2(8歳2か月)時 VA(語い年齢)=7歳8か月 SS(評価点)=7(「平均の下」水準)。

小4(10歳4か月)時 VA(語い年齢)=9歳9か月 SS(評価点)=8(「平均の下」水準)。

・いずれにおいても、担当者が述べた単語を聞き返して確認することや、無答(「分かりません。」「知らない。」「習ってない。」等の理由で絵を選択しないこと)が一切みられず、誤答数(聞こえた音から正答を推測し、間違った絵を選択すること)が多い。

・誤答数が多いことが、本検査で測定される語い力が「平均の下」水準にあることに、影響を及ぼしている。

## (3) 難聴に関する自己理解の特徴

・対象児、保護者とも、騒音下であっても、補聴器を装用していなくても、特に言葉が聞き取りづらいとの認識はもっていない。したがって、聞こえにくさに対する配慮が必要との認識はない。

## 2. アプリを用いた活動の具体的内容(平成 28 年 6 月～平成 28 年 12 月)

### (1) 会話を楽しむ。

#### A. 話し合いに適した環境を知る。

○騒音の有無を判断する。

iPad の騒音計アプリ「Sound Meter」は音の有無を視覚的に捉えることがしやすいため、音の有無を判断する活動に「Sound Meter」を活用した。対象児が聴覚的に捉えることができない音の存在に、視覚的情報を得て、初めて気付くことができた。



ここまで動いてるってことは、今、音がしてるの？ないでしょ？全然聞こえないよ。



○騒音下における自己の聞こえ方の特徴を知る。

iPad のアプリ「youtube」を使って、人混みで生じがちな騒音を録音した動画を選択した。「youtube」には、通常の学級において、授業中日常的に聞こえている暗騒音に近い音声録音された動画が数多くアップされており、対象児と一緒に素材を選択するのに最適であった。本活動では、騒音が流れる中で、「ガ」「ワ」のような音声言語(単音節)を提示し、聞こえた音節を聴写する課題を実施した。騒音を流していないときの聴写結果と比べ、正答率が明らかに低いことから、騒音があるときは聞こえづらさが増すことを理解することができた。



ざわざわしてると聞こえない…。みんなは分かるのに、不利…。



騒音が少ない場所を設定してから、会話した方がいい。

#### B. 補聴器を活用する。

○補聴器は自分の聞こえ方に合わせて調整できることを知る。

iPad のアプリ「イコライザ」を用いて、補聴器調整の疑似体験を行った。聞こえ方の特徴を知るための活動を実施した結果、子音の聞き誤りが多いことに気づいた対象児は、「イコライザ」を用いて録音した音声の高音域を強調した

り、低音域を強調したりしながら「こうすると聞こえる。」と実感することができた。



聞こえ方が変わる！ 調整すると、補聴器の聞こえ方も変わるってこと？



聞こえ方に合わせて、補聴器を調整した方が、会話しやすい。

### C. 音声を確実に理解する方法を知る。

○相手の声の大きさが、言葉の聞こえ方に影響することを理解する。

iPadのアプリ「ボイスメモ」で録音した言葉を、音量を調節しながら聞く活動を行った。自分にとって適切な声の大きさがあり、大き過ぎても小さ過ぎても言葉が聞こえなくなることが理解できた。



声が大きすぎると、何か分からなくなる。



○相手の口元を見ると言葉が理解しやすくなることを知る。

iPadのアプリ「カメラ」を用い、口形をはっきりさせて言葉を述べた様子をビデオ録画し、単語当てクイズを作った。相手が口形をはっきりさせて話した場合、口形が言語理解の重要なヒントになることが理解できた。



口の形を見れば、何て言ったか分かる！  
はっきり開けてくれれば、すぐ分かる。



○視覚情報(動画・絵・文字等)を介在させることの効果を考える。

iPadのアプリ「youtube」「safari」「UDトーク」で動画、絵等の視覚的補助及び文字を介在させながら会話を楽しんだ。音声言語だけの会話に比べ、視覚的補助があれば、ずっと会話が続くことが体験的に理解できた。



ああ、このことね。聞くだけより字や絵で見た方がずっと分かりやすいよ。



○実施者は、対象児が聞き返す等の方法で、曖昧に聞き取った言葉を確認した時を逃さず、すぐにほめる。

会話のとき、相手に、声の大きさを調節してもらったり、口の形をはっきり見せてもらったり、字や絵を見せながら、話してもらえばいい。自分は、分からなければ聞き返せばいい。

### (2) 語彙力の向上を図る。

○音声を聞いたり、視覚的情報を得たりしながら、未知の事項についても、会話を通して理解する経験を重ねる。

○静かな場所で、実施者が、対象児の興味の対象を話題の中心にし、対象児の聞きやすい声の大きさ、話速で、口形をはっきりさせて伝える。

### (3) 難聴に関する自己理解の力を育てる。

○(1)(2)の活動を行う中で、自己の聞こえ方について客観的に認知し、言語音を正しく聞き取るために必要な支援を理解して、分かったことを周囲に発信していく。

### 3. 事後の変化(平成 29 年 1 月まで)

#### (1) 会話の変化

- ・騒音が少ない場所を設定してから、会話した方が聞き取りやすいことを実感し、静かな場所を探して会話するようになった。
- ・聞こえ方の特徴は一人一人違うことから補聴器は各々の聴力に応じて調整した方が、会話しやすくなることが分かり、補聴器店でこまめに調整してもらい、会話に活用するようになった。
- ・自分の話を相手がすぐに理解できないときは、絵を描いたり文字で示したりしながら会話するようになった。
- ・相手の言葉が曖昧に聞こえたとき、聞き返すことができるようになった。

#### (2) 語彙力に関する変化

##### ・PVT-R(絵画語い発達検査)

小5(11歳4か月)時 VA(語い年齢)=10歳11か月 SS(評価点)=9(「平均」水準)。

- ・無答(「分かりません。」「知らない。」「習ってない。」等の理由で絵を選択しないこと)が出せるようになり、誤答数(聞こえた音から正答を推測し、間違った絵を選択すること)が大幅に減った。
- ・その結果、SS(評価点)が「平均の下」水準から「平均」水準に向上した。

#### (3) 難聴に関する自己理解の変化

- ・対象児、保護者とも、言葉が聞き取れないとき、それが自分だけの責任ではなく、環境設定の工夫や補聴器の調整、また、相手に声の大きさを調節してもらうこと、口の形をはっきり見せてもらうこと、字や絵を見せながら話してもらうこと等によって、理解しやすくなることが、分かるようになった。
- ・対象児、保護者とも、騒音が少ない場所を設定することの大切さが分かるようになった。

### 【報告者の気づきとエビデンス】

#### 1. 主観的気づき

##### (1) 会話を楽しむ。

音声言語によるやりとりが続くようになった。

##### (2) 語彙力の向上を図る。

相手が何と言ったか聞き返したり、文字で書いて確認したり、言葉の意味を尋ねたりしながら話を聞くようになった。また、その言葉を自分から使う姿も見られるようになった。

##### (3) 難聴に関する自己理解の力を育てる。

「聞こえない。」ことを自分の一人の責任にせず、相手に「もう一度言ってください。」等配慮を求められることができるようになった。補聴器は調整しながら活用するものであることを理解し、補聴器店に数回行き、聞こえ方に応じた調整を依頼することができた。通常の学級において、騒音の少ない教室環境を設定することができた。

## 2. 気づきに関するエビデンス

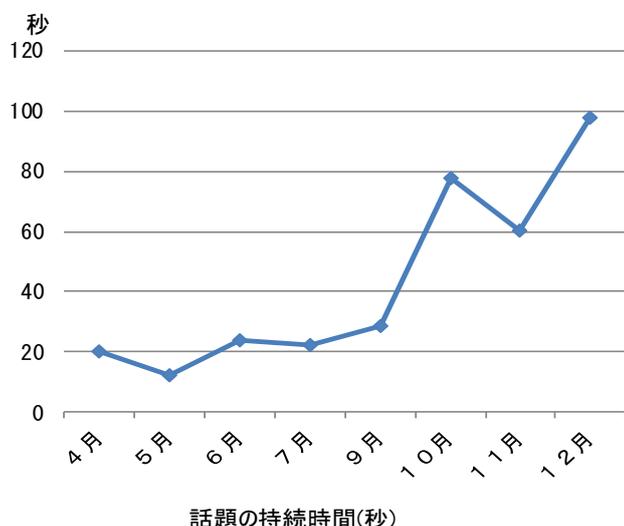
### (1) 会話を楽しむ。

個別指導中の会話を月一回30分間録音した。30秒以上の中断がみられない話題を抜き出し、その話題についての、音声言語によるやりとりの持続時間を調べた。平成28年10月から、一つの話題に関する会話の持続時間が伸びていることが分かった。その内容はほぼ聞こえに関すること、および補聴器に関することであった。

### (2) 語彙力の向上を図る。

PVT-R(絵画語い発達検査)を実施し、正答数及び修正得点、選択誤答数、評価点をそれぞれ比較した。対象児はこれまで、本検査実施時音声で提示された語を、聞き返したことがなかったが、今回はしばしば聞き返した。その結果、選択誤答数が減少し、正答数が増加した。

対象児は、これまで「聞き取れないのは、自分が聞こうとしていないからだ。」という誤った自己認識を持っていたが、本研究を通して、分からなければ聞き返すという行動を身につけた。PVT-Rの検査結果は、対象児が、音声言語によって語を提示されたとき、分からなければすぐに聞き返して確認する行動さえとれば、正確に理解できる語が増えることを表している。



絵画語い発達検査の結果

	正答数	修正 得点	選択 誤答数	評価点
小4時	60	56	11	8
小5時	64	63	4	9

### (3) 難聴に関する自己理解の力を育てる。

- ・自分の聞こえ方の特徴や、補聴器について、理解が深まり、補聴器をより使いやすくするために、補聴器店で調整を依頼するようになった。
- ・担当者が述べた単語について、聞き返したり、文字で書くことを求めたり、視覚的補助を求めたり、確認のために自分から絵を描いたりして確かめるようになった。
- ・保護者とともに在籍学級担任に依頼し、教室の机といすにテニスボールを装着して、教室で生じがちな雑音を抑制し、対象児が言語音を聞き取りやすい環境を設定した。

### 【今後の課題】

対象児は、自己の難聴について、また、配慮があれば会話を楽しめることについて、体験的に理解し始めたばかりであり、周囲に対し、合理的配慮を求めて行動するための、第一歩を踏み出したところである。

○通常の学級における難聴に関わる理解推進

○通常の学級での授業における文字情報の提供

○難聴が及ぼす困難への配慮方法、殊に文字情報の提供に関わる進路先への確実な引継ぎ

以上三点を今後の重要な課題と考え、すすんで環境に働きかけ、合理的配慮を求めることができるよう、支援していきたい。